

動物も人と同様に、健康や治療を考へる上でその死因を知るのには、とても重要なことです。人の死因の第1位は「がん」でおよそ30%、2位は心疾患、3位は脳血管疾患となっていています。では、ペットはどうでしょう。



三崎 将人

みさき動物病院長
(高岡市京田)

犬・猫のがん

人間ほど正確なデータはありませんが、発表されたいくつかのデータによると、犬・猫ともに第1位はがんです。しかもその割合は人と比べてもかなり高く、犬が約50%、猫が約30%以上と他の疾患を大きく引き離しています。がんは非常に身近な病気であり、ペットの寿命を左右する注意すべき病気です。がんはほとんどの場合、治療をしないままたとえペットを死に至らしめます。現在、残念ながら確実に予防する方法も治療する方法もありません。ただ、全くなすべき手段がないというわけではありません。ご自身の犬の対処法を知っておくことで、愛するペットを守りつづけることもできます。

不妊手術で減少

まずは予防についてです。乳腺腫瘍のうち、犬は約50%、猫では80%以上が悪性、つまりがんといわれています。乳腺腫瘍



抗がん剤を点滴中の猫。この他、近年はさまざまな治療法が登場している。

しつこりは放置しない

診断された場合は、早めに去勢手術を行うべきでしょう。他に、栄養バランスの良い食生活をし、受動喫煙や除草剤への接触、度を越した紫外線に当

す。そのため腫瘍は、日常のスキンシップから飼い主さんが見つけるケースがたくさんあります。何か違和感があったら、すぐにかかりつけの獣医さんに診てもらってください。

の発生は、早期の不妊手術で少なくなることが知られていますが、確実な予防法はまだありません。そこで、続ける対策は早期発見、早期治療ということになります。犬や猫のがんは、皮膚や乳腺などの体の表面にできる割合が高く、手で触れられるもの、目に見えるものが多いといえます。

もちろん、しつこりが見つかっても、がんであるとは限りません。良性の場合もあります。大事なことは、様子を見過ぎないことです。治療できる時期を逃してしまつてもいいから、必要ですが効果の高い「放射線治療」が、三大治療といわれています。

たのを防ぐことなどが挙げられますが、確実な予防法はまだありません。そこで、続ける対策は早期発見、早期治療ということになります。犬や猫のがんは、皮膚や乳腺などの体の表面にできる割合が高く、手で触れられるもの、目に見えるものが多いといえます。

腫瘍の正体を必ず明らかにしましょう。結果が悪性でも、転移が少ないうえ、進行が遅やかなもの、薬が効きやすいもの、早期のきちんとした外科手術により根治するものも少なくありません。これからどうなっていくのか、どうすべきなのか、何ができるのかをしっかりと相談しましょう。命に関わる重要な問題なので、セカンドオピニオンを求めるのも有効かもしれません。

「いつも一緒に 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。

がん宣告は生涯の終わり、ではありません。飼い主の方は、どの子でもいいのではなく「この子と一緒になりたい」はずですから、その後の生活と向かい合わなければなりません。答えは、治るか治らないかだけではないのです。この先に起こり得ることを見据えて、今すべきことを始められることを決めていきましょう。

がんの治療は、最も有効で早期なら根治も期待できる「外科手術」、全身に作用することのできる「抗がん剤」、特殊な治療をしなければならぬ、と考える必要はありません。一番大切なことは「一緒にいてあげること」です。現実を目を背けず、愛するペットにできることをしてあげてください。